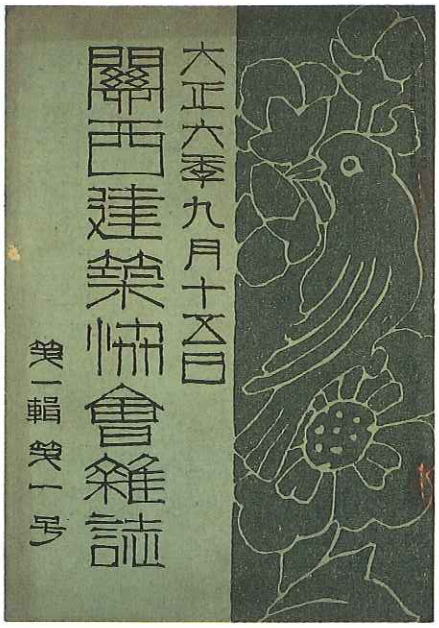
建築と社会

〔復刻版〕

不二出版

『建築と社会』は、関西を中心とする建築界の動向を伝えて七十五年を経過した。「建築は社会とともに発展する」という観点にたち、建築技術のみならず、都市・住宅・防災等の諸問題を含み、時代とともに変遷してきた本誌は、まさに日本近代史の縮図である！



創刊号表紙

大正十一年一月号表紙

全八七巻・別冊一 完結

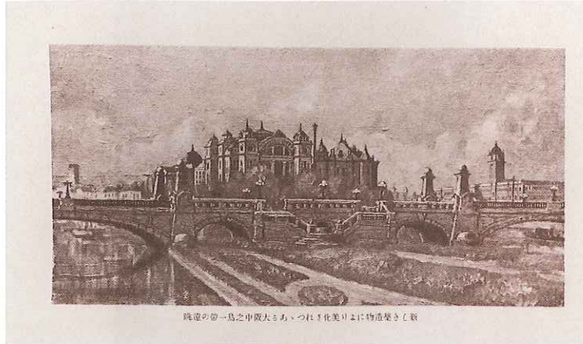
大正六年九月～昭和三十年十二月

解説＝山形政昭〈大阪芸術大学助教授〉

揃定価＝一、五四〇、〇〇〇円〈本体価格〉

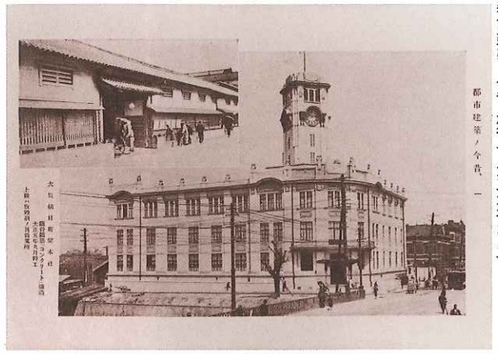
建築と社會

日本建築協会役員 大正十一年一月号



新しき築造物により美化されつつある大阪中之島一帶の遠望 創刊号 大正六年九月号

新築成れる大阪毎日新聞社 大正十一年二月号



都市建築ノ今昔 創刊号 大正六年九月号

『建築と社会』復刻版の発行について

日本建築協会は、明平成四年三月三〇日に創立七五年を迎えることになりました。これを機に大正六年九月から連綿と発行を続けている『建築と社会』誌の復刻版を下記概要のとおり発行することになり、現在、その準備に入っています。創刊号から欠号なく保存しているのは、当協会に一部があるのみで、全国の図書館、大学、建築関係団体とも完全保存がされていない状況です。大正、昭和、平成と三代を通する近代建築、まちづくりに関する法制、社会経済、国民生活、調査研究などの生き証人ともいえる本誌がこのような保存状況では誠にさびしく、調査研究に携わる皆さんからも、復刻の要請があるところです。また、第二次大戦後の紙質が非常に悪く、長期の保存に耐えない状態でもあります。

この事業は平成八年までの五ヵ年計画でありますが、関係各位のご協力ご支援を得て是非成功させたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

——（社）日本建築協会

昭和四年五月号表紙

◆すいせんの言葉

関西建築の多彩な歴史を理解する

佐野正一〈日本建築協会会長〉

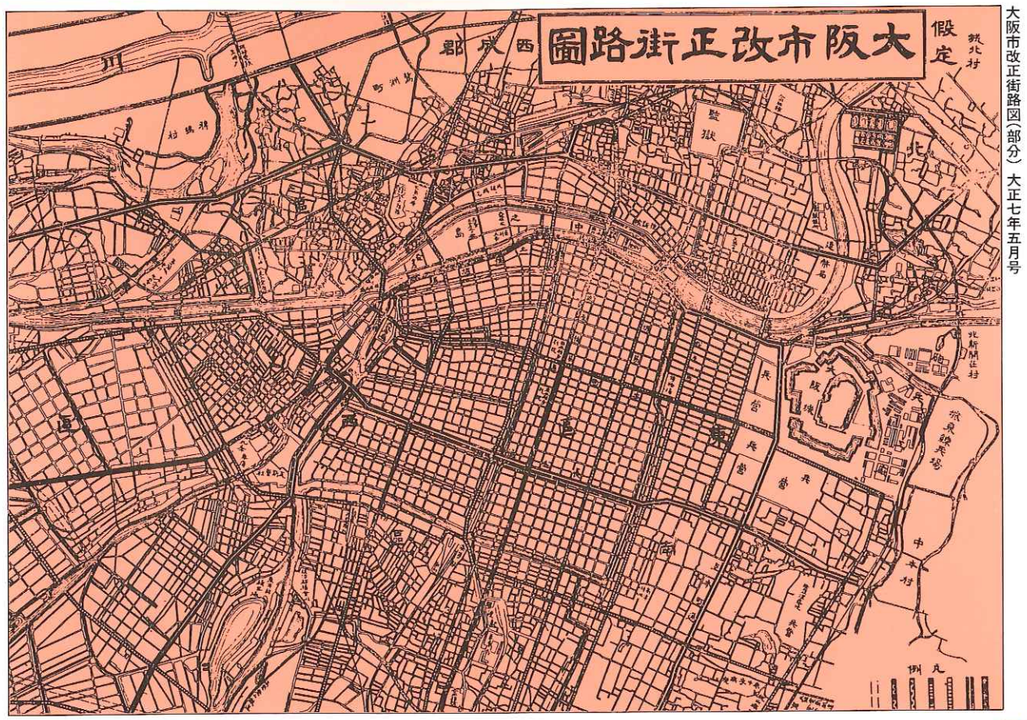
明治から大正期にかけ、日本は内外政治、社会、経済あらゆる面で驚くべき近代化を遂げた。ことに技術・産業面では西欧の先進にならって日々躍進的変貌を見せた。近代社会の容器となり、その反映でもある建築面では特にはげしい近代化への胎動が感じられた時代ではなかったか。

片岡安氏らを中心に大正六年春関西建築協会が誕生したのは、こうした建築の進展期に際して建築技術家が時代をよく洞察し、結束して将来を計り、社会にも訴えようとする動機に発したものである。その年会誌『関西建築協会雑誌』を創刊し、その後会名を日本建築協会と改めたのに伴い会誌名を『日本建築協会雑誌』とし、さらに大正九年一月から『建築と社会』と改題して今日につづいている。この団体が学術・技術面の進歩発展にとどまらず対社会を強く意識してきた性格を表すものとしていまでは広く知られるようになった。

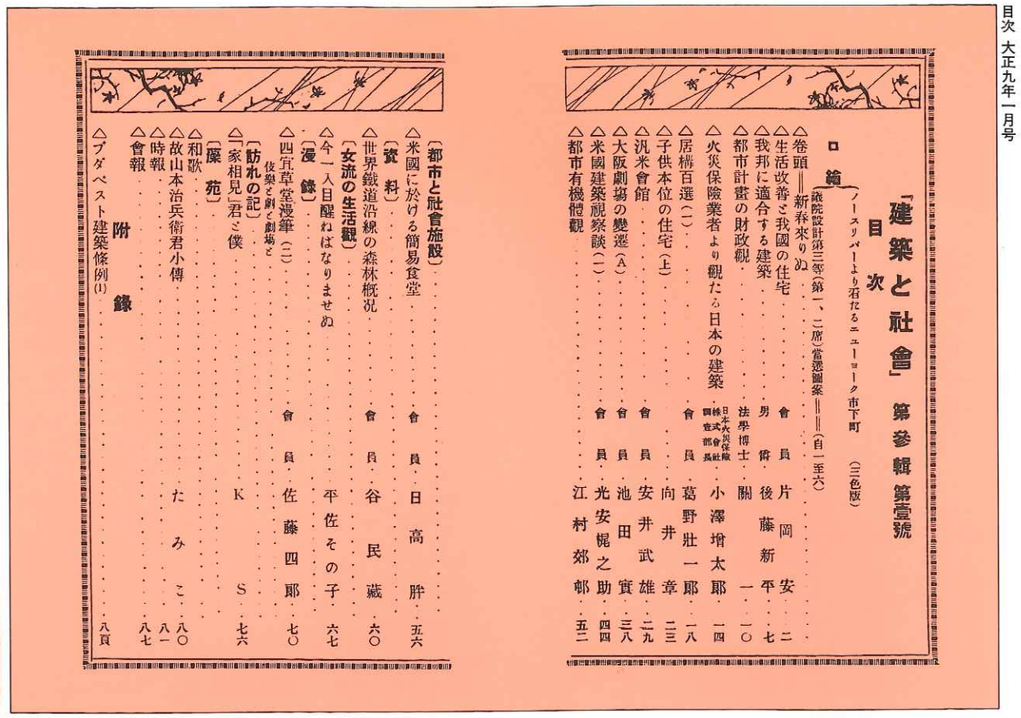
発刊以来、平成二年一二月号で七一巻通巻八二五号を発行し、その内容は建築にかかる計画・技術・経済・法令・人と動き等あらゆる面に及んで論説・解説・紹介を徹底しており、近年は特集的にテーマを選んで取り扱っているが、内容が極めて高度で充実していると評価が高いのはなによりのことだ。建築が社会とともに発展するという観点から都市・住宅・防災等のテーマは一貫してとりあげられているが、時代とともにテーマにも種々変遷があるのが興味深い。

このたび本会ではこの会誌の復刻をとりあげることになった。時代が大正から昭和となり、さらに今は平成に移った。建築協会は近年中に創立八〇周年を迎えることになるが、この八〇年はまさに日本の激動の歴史であり、はげしい苦痛と再生を味わう経験を重ねた時代である。会誌の復刻によって先人達の足跡をたどることは極めて意義深いものがあり将来のためには大きな基礎となるものと思う。また関西に発足した本協会の会誌記事を通じて関西の社会の動きを顧みることにも大きな意味があると思う。

建築と社會



大阪市改正街路図（部分）大正七年五月号



目次　大正九年一月号

「建築と社會」第參輯第壹號

目次

口絵

（帝院設計第三等（第一、二席）當選案――新春來りぬ）（自一至六）

△巻頭――新春來りぬ……會員　片岡安……二

△生活改善と我國の住宅……男爵　後藤新平……七

△我邦に適合する建築……法學博士　關一……一〇

△都市計畫の財政觀……

△火災保險業者より觀たる日本の建築……日本火災保險株式會社　小澤增太郎……一四

△居構百選（一）……會員　葛野壯一郎……一八

△子供本位の住宅（上）……向井章……二三

△汎米會館……會員　安井武雄……二九

△大阪劇場の變遷（A）……會員　池田寅……三八

△米國建築視察談（一）……會員　光安梶之助……四四

△都市有機體觀……江村郊郎……五二

〔都市と社會施設〕

△米國に於ける簡易食堂……會員　日高胖……五六

〔資料〕

△世界鐵道沿線の森林概況……會員　谷民藏……六〇

〔女流の生活觀〕

△今一人目醒ねばなりませぬ……平佐その子……六七

〔漫錄〕

△四宜草堂漫筆（二）……會員　佐藤四郎……七〇

〔訪れの記〕（伎樂と劇と劇場と）

△家相見（君と僕）……K……S……七六

〔園苑〕

△和歌……た……み……こ……八〇

△故山本治兵衛君小傳……八一

△時報……八七

△會報

附錄

△ブダペスト建築條例（1）……八頁

社会性を貫ぬく永年の記録

東畑謙三〈東畑建築事務所会長〉

創立七五年を迎えた日本建築協会は発足年、すなわち大正六年は関西建築協会であった。大正八年に今の名称日本建築協会となった。創設当初より機関誌が発行され『関西建築協会雑誌』、『日本建築協会雑誌』として毎月出版され、大正九年一月より現在の名前『建築と社会』と改題され七二年間続いて今日に到っている。機関誌の名前としては当時としては全く画期的なものだったであろう。発刊の辞をみると片岡安氏を中心とした関西建築界の指導者は名文をもって、建築技術が社会的接触を広めなければならぬことを力説されている。いわゆる大正デモクラシーの時代でここに「社会」という字が生れたのであろう。雑誌の内容も都市計画、都市改造論、住宅問題等を始め防災問題、建築物の法制問題等が多く記載されている。従来の建築技術を単なる芸術の一分野であるとか、アトリエ的考えよりぬけ出し、対社会的な考えの論説で満たされている。『建築と社会』という題名そのままで七〇余年も連続出版されている建築専門雑誌は百年を迎えた日本建築学会の『建築雑誌』以外にはない。一方は日本の建築学術の進歩を記録した貴重な資料であり、こちらは建築術の対社会性を強調した永年の記録である。

わが建築界にとってこの七五年間は戦争をはさんで変化の多い年月であった。そうして今日のような世界的な繁栄を迎えたのである。東京の新宿副都心や大阪城傍のビジネスパークへ行けば世界に冠たる都市像がみられる。七五年間の『建築と社会』誌をみると、よって来たる所以がありありとわかり、先輩の活躍振りに改めて尊敬の念がわき出てくる。

多くの感銘を与えた『建築と社会』

塚本猛次〈日建設計最高顧問〉

この度、日本建築協会では、創立七五周年記念事業の一つとして、月刊誌『建築と社会』の大正六年の創刊号から、昭和三〇年一二月までの復刻版を、出版することになった。実は大阪を中心とした地域の図書館で『建築と社会』誌が、蔵書として、そなえられている所が、あまりないので、参考にしようと思っても、結局協会の蔵書にたよることになり、研究者にとっては、なかなか手間がかかることになっていた。

私事で恐縮ですが、私が大阪に来ることになったのは、昭和九年に、東大を卒業した時です。その前年の秋に、当時の建築学科の内田祥三先生に云われて、竹腰先生にお目にかかり、大阪へ来るように云われた。当時は同僚の諸君で満州へ行く人もいた。

大阪へ来て一、二年たってから、建築協会に入会し、何かと仕事を手伝った。大阪に来てさみしいと思っても、協会の組織が、おつき合いを深めてくれた。先輩の諸先生は勿論、建築関係の方々にもお目にかかることができた。

当時、協会は片岡先生が会長だった。思い出すことは、年末には料理屋に呼んでくれて、一年の労をねぎらってくれた。そんなわけで、私は協会との縁がつながってきたわけです。そして協会を通じて、各方面の先輩諸兄にお目にかかることができたし『建築と社会』誌を通じて、関西の建築の情報を知ることができた。また先輩諸兄の論文などで、多くの教示をえた。特に諸先輩の論文、報告は、『建築雑誌』と異った近づき易い刺激をうけた。

殊に私としては、竹腰先生、長谷部先生、高橋栄治さん、池田宮彦さんの諸先輩が手近におられて、指導して頂くし、しかられた事もあるが、同時に『建築と社会』誌からも感銘をうけることが多かった。

今回復刻される『建築と社会』誌は、その内容から改めて、社会的価値が見出されるものと思います。

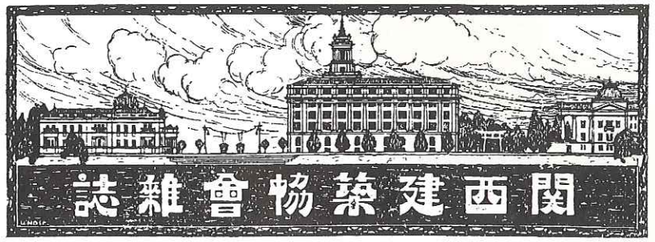
都市近代化への民間建築家の活動

足立孝〈大阪大学名誉教授〉

大阪は早くから人口集中による多くの問題に直面し、明治時代には、国に先がけて長屋建築規則や府建築取締規則を施行して大阪独特の街なみを形成してきたが、大正時代になってからは大阪都市圏の拡大と近代都市への整備に追われていた。大正六年

建築と社會

本文見本　原寸　発刊の辞　創刊号



發刊の辭

我が關西建築協會は、時代の機運に促がされ、建築技術家の覺醒に由り、大戰亂第四年の春、梅が香薫る關西の天に呱々の聲を上げたり。

思ふに、明治維新以來、我が國の文物は其のあらゆる方面に亘りて、空しく苟且主義の上に樹てられ、少しも確固たる基礎を有せず、所謂過渡時代の混沌たる狀態にありしが、時は絶ゑ間なく進みて黎明の氣は天地に漲りぬ、曉の鐘將に高く鳴らんとす。

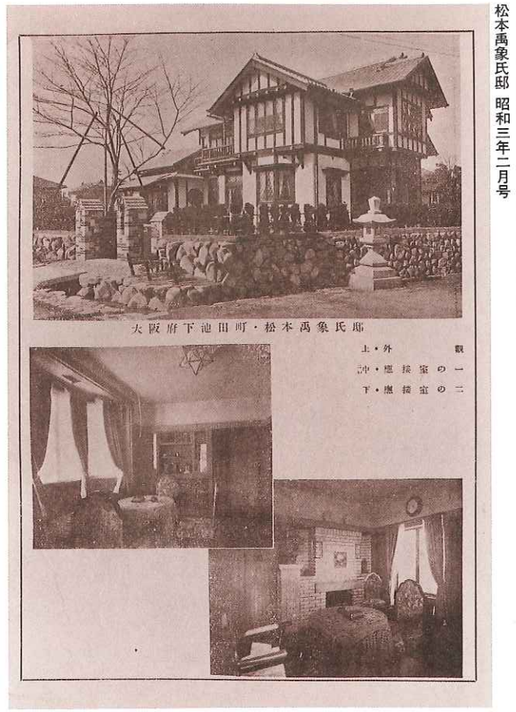
此の進展期に際し、社會を指導する大抱負の下に、我が國建築界の堅實なる發展を期し、科學的に組織ある文明的都市の建設を計るべき急要の時期なるを覺悟し、以て將に鳴らんとする曉鐘第一の金鋼杵たらんと欲す、蓋し、其の事や大にして其の責や亦重しと云はざるべからず。

我が關西在住の建築技術家は茲に結束して起ちぬ、偏に其の任務の輕からざるを感じながら、專ら斯の偉いなる目的遂行に熱中し、從來我が國一般に措いて問はざりし都市建築の拘束改良、家屋政策、其の他文明的施設の刻下急要の問題にして苟くも建築に關連せるものは、凡て之が研究調査をなし、之を社會に發表して啓蒙の位置に立たんと期す。

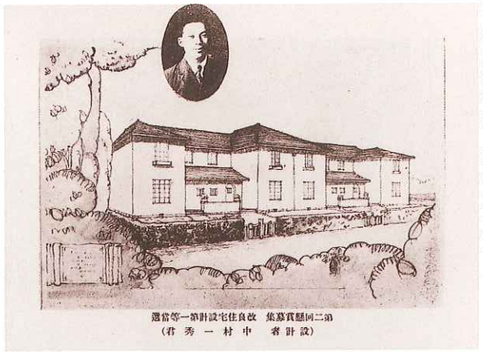
天下有識の士、幸に此の誠意に同情し、斯の事業の成功に協力せらるゝあらば、豈獨り我が關西建築協會の利益のみなるならんや。

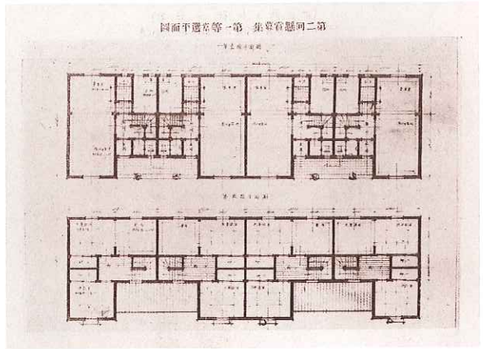
本誌は本協會活動の一部隊に過ぎずと雖も、其趣旨は本協會の目的遂行の一機關にして、今後紙面に現はるゝ熱誠なる努力は漸を逐ふて社會を刺戟し、吾人同志の目的の一部が達せらるゝ日のあらん事を確信して疑はず。

敢て抱負の一端を述べて發行の辭となす云爾。



松本萬象氏邸　昭和三年二月号





改良住宅設計第一等当選　大正十一年一月号

『建築と社会』の復刻版に期待する

金多　潔〈京都大学教授〉

（社）日本建築協会は大正六（一九一七）年に設立され、その機関誌である『建築と社会』も同じ年に創刊された。当時、欧州では第一次世界大戦の最中であり、ロシア革命がおきたのもこの年であった。世界の情勢は激動を繰り返しながら日本の政治・経済や人々の生活にも影響を及ぼしてきたが、通信・交通の手段が一層整備されたこの頃からわが国の建築界でいろいろな面における近代化が始まっている。

『建築と社会』は関西の中心である大阪に本拠を置いて建築界の移り変わりを様々な視点で捉えてきた記録であって、創刊当初の高邁な精神と編集方針とを根幹としながら内容にバラエティをもたせており、歴史的・社会的な意義は極めて高く、近代建築とまちづくりに果した役割もまた顕著であり、研究資料としても貴重な存在である。しかし、長い時間が経過してしまった現在では、これらの大切な資料が何時しか散逸してしまい、改めて入手するのが困難な状態である。

当協会の創立七五周年記念事業の一つとして、このたび『建築と社会』の創刊号から昭和三〇（一九五五）年一二月号までの復刻版が刊行される運びとなったことは誠に喜ばしく、早期の実現が待ち望まれる。

に誕生した『建築と社会』は、当時の状況を反映して都市計画や住宅政策に関する多くの論説で誌面を賑わし、さらに講演会を開催して社会に働きかけると共に政府にその法制化を要請するなど積極的な活動を展開している。また、大正デモクラシーの波に乗り、生活・住宅改善や田園都市思想の普及、郊外住宅の研究を進め、大正一一年の「住宅改造博」をはじめ、多くのコンペや博覧会によって社会の啓発に努め、住宅近代化を推進した。次いで、震災や風水害、防火、防空から復興計画、国民住宅などの特輯をしているが、主要テーマ以外にも毎号歴史から材料施工に至るまで、建築全般にも目配りをしていて、時代の変遷に伴う建築界各面の動きをも知りうる貴重な資料になっている。特に世界的都市を目指し、社会的にも活発な活動をした諸先輩の足跡は我々後輩にとって極めて有益な刺激になると思う。

『建築と社会』復刻版概要

巻数＝全八七巻・別冊一 完結
体裁＝A5判（一～二二巻）、B5判（二三～八七巻）
上製本・クロス装、写真コート紙使用
本文クリームキンマリ（中性紙）使用
●広告ページおよび表3・4（裏表紙）は復刻版より除外、新たに広告索引を付す
頁数＝本文総三万九、〇〇〇頁
別冊＝解説・総目次・索引
（別冊のみ分売可＝一八、〇〇〇円）
解説＝山形政昭（大阪芸術大学教授）
揃定価＝本体価格一、五四〇、〇〇〇円

昭和三年二月号表紙

表示価格は、全て税別

配本案内

	●巻数	●内容（年月）	●本体価格	●配本年月
第一回配本	第一～五巻	大正六・九～八・三	八万円	一九九一年一〇月
第二回配本	第六～一〇巻	大正八・四～九・一二	八万円	一九九二年四月
第三回配本	第一一～一六巻	大正一〇・一～一一・一二	九万六、〇〇〇円	七月
第四回配本	第一七～二二巻	大正一二・一～一三・一二	九万六、〇〇〇円	一〇月
〔以上A5判、以下B5判〕				
第五回配本	第二三～二七巻	大正一四・一～一五・八	九万円	一九九三年一月
第六回配本	第二八～三二巻	大正一五・九～昭和三・四	九万円	四月
第七回配本	第三三～三七巻	昭和三・五～四・一二	九万円	七月
第八回配本	第三八～四二巻	昭和五・一～六・八	九万円	一〇月
第九回配本	第四三～四七巻	昭和六・九～八・四	九万円	一九九四年一月
第一〇回配本	第四八～五二巻	昭和八・五～九・一〇	九万円	四月
第一一回配本	第五三～五七巻	昭和九・一一～一〇・一二	九万円	七月
第一二回配本	第五八～六二巻	昭和一一・一～一二・六	九万円	一〇月
第一三回配本	第六三～六七巻	昭和一二・七～一三・一二	九万円	一九九五年一月
第一四回配本	第六八～七二巻	昭和一四・一～一五・八	九万円	四月
第一五回配本	第七三～七七巻	昭和一五・九～一七・一二	九万円	七月
第一六回配本	第七八～八二巻	昭和一八・一～二五・一二	九万円	一〇月
第一七回配本	第八三～八七巻	昭和二六・一～三〇・一二	九万円	一九九六年一月
最終回配本	別冊	解説・総目次・索引	一万八、〇〇〇円	一九九七年七月
			合計一、五四〇、〇〇〇円〈税別〉	

●誌名の変遷
『関西建築協会雑誌』T6・9～T7・12 →『日本建築協会雑誌』T8・1～T8・12 →『建築と社会』T9・1～

不二出版（株）
〒一一三 東京都文京区向丘一―二―一二
電話〇三―三八一二―四四三三 FAX〇三―三八一二―四四六四